

Title	企業グループにおける親会社・関係会社関係マネジメントの課題
Sub Title	
Author	雷云(Rai, Un) 高木晴夫
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	1999
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 1999年度経営学 第1560号 連絡が必要
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001999-1560

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

所属ゼミ	高木研究会	学籍番号	89828984	氏名	雷 云
(論文題名)					
企業グループにおける親会社・関係会社関係マネジメントの課題					
(内容の要旨)					
<p>資本市場から価値創出への厳しい圧力を受けている日本の企業グループは大きな転機に直面しており、2000年3月期からの企業の情報開示が連結中心になることに対応するために根本的な事業リストラクチャリングを開始した。この複数の企業により形成された企業グループの本格的な再編成とも言える変革は、根深く積み上げてきたグループ内企業組織関係の基盤を弛め、戦後50年間になかった親会社と子会社または関連会社間の存立関係の変化をもたらしている。</p> <p>そこで本論文では、今までに「親会社中心主義」と言われた企業グループにおける親会社による関係会社に対するコントロールの現状調査を出発点として、企業グループにおける親会社と子会社または関連会社間の関係の実態について考察した。親会社によるコントロールの表現形式に着目し、子会社、または関連会社の親会社によるコントロールに対する認識を把握した上で、親会社の企業グループマネジメントの日常活動がもたらした子会社または関連会社に対するコントロールの仕組み、あるいはメカニズムを再確認した。</p> <p>関連する文献をレビューすると同時に、親会社と子会社または関連会社の2つのサイトから、質問紙およびヒヤリングによる実地調査を重ねて、現段階での日本の企業グループにおける親会社による子会社または関係会社に対するマネジメントの現状、実態に対して考察をした。</p> <p>その結果、現時点では親会社による子会社または関連会社に対するコントロールは「人事管理・制度の親寄り度合い」、「資源配分のための評価・管理の度合い」の二つの意味合いで表現できる。しかもその背後に存在する、出向、転勤といった人事管理上のメカニズムが大きな役割を果たした「親会社中心主義」の本質および実態をつかむことができた。</p> <p>調査で得られた結果を踏まえて、連結中心の情報開示制度の実施に向けて、現状の親会社と子会社または関連会社間に存在している、親会社の一方的企業グループの事業ドメイン再定義、子会社または関連会社の親会社に対する関係重視、という傾向を問題として取り上げた。また、これからの企業グループマネジメントにおいて重要と思われる人的資源および技術資源のマネジメント課題をも提示して結論づけた。</p>					